砥川地区の伝統芸能「砥川獅子舞」

砥川地区で毎年10月17日に行われている「砥川神社の秋の大祭」。大祭で奉納されるのが、豊作を祈願する「砥川獅子舞」です（※獅子舞の開催日は17日に限らない）。上砥川、中砥川、下砥川の3つの地区で、3年に一度の持ち回りで行われている貴重な民俗芸能です。およそ400年ほど前に始まったと伝わります。

大祭の日、「出立ち」の家に集い一度舞われて御神酒を上げた後で、神社まで行列が練り歩きます。

行列は、獅子（右にオン、左にメン）に従い、太鼓、つる子（親に肩車された稚児）、笛の順。神社に到着すると玉串がささげられ、軽やかなリズムの楽が始まると、オンジシとメンジシが一緒に花火を食いちぎって鳥居をくぐります。その後も男女の踊り手や、子どもたちと獅子たちが絡み合い舞うなど、昼と夜を合わせて演じられる儀式と演舞は見どころ満載です。

オンジシとメンジシが一つになるシーン。花火の迫力も満点です（提供写真）

圧巻の花火シーン 演者はやけど覚悟

「古里の伝統芸能を絶やしてはいけないと、40年前に愛好会を立ち上げ、その後、保存会を設立しました」と話すのは、砥川獅子舞保存会会長の森田眞一（もりたしんいち）さん（72）です。会ではこれまで、県内はもとより全国のイベント会場で「砥川獅子舞」を演舞し、広く知らしめる活動を行ってきました。

獅子舞は5つの物語で構成され、演舞の中では、筒花火を使ったシーンが何度も登場します。

「獅子舞の見どころは、花火を使ったシーン。このために会では安全を期すために毎回、火薬類取扱保安責任者の免許を取得し、消防署や警察署の許可を得て開催しています」と話すのは藤島朝利（ふじしまあさとし）さん（71）。

「獅子を演じる人たちはやけど覚悟です。毎回、真剣勝負。だからこそ、迫力があるんです」と話すのは、獅子舞の保存に尽力してきた福馬則幸（ふくまのりゆき）さん（69）です。「昨年はコロナ禍の影響で中止となり、今年も開催が危ぶまれますが、早く元気な砥川獅子舞をお見せできればと思います」と菅啓一（かんけいいち）さん（65）も付け加えました。

郷土の偉人 富田茂七の偉業

まぶしい緑色に染まる、飯野地区に広がる青田。水田を潤しているのが、赤井地区の湧水「そうめん滝」から流れ来る砥川用水路の水です。

江戸時代、この用水路の建設に尽力したのが、庄屋の富田茂七（とみたもしち）という人物です。水不足で田畑が荒れてい

左から菅啓一さん、森田眞一さん、福馬則幸さん、藤島朝利さん

立派なたたずまいの拝殿

砥川神社の鳥居と楼門